

教 仏 名 聞

第57号
(発行日)
2015年6月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》
○ 〈同朋の会〉
毎月22日 午後2時始。
○ 〈念仏座談会〉
毎月2日と12日 午後3時始
○ 〈聖典学習会〉
毎月6日 午後7時始。
○ 〈真宗入門講座〉
毎月18日 午後6時30分始。
* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

神光の離相をとかがざれば

(和讃法話)

神光の離相をとかがざれば

無称光仏となづけたり

因光成仏のひかりをば

諸仏の嘆ずるところなり

(浄土和讃)

(現代語訳)

阿彌陀如来の威神光明ともいわれる不思議な光は、すがた形を離れていて、言葉で説くことができないので、無称光仏と名づけられた。この阿彌陀仏は光明無量の願を因として仏に成られた無量の光明であって、そのお徳を諸仏は讚嘆したもう。

* * *

この親鸞聖人のご和讃も曇鸞大師の『讚阿彌陀仏偈』の「神光、相を離れたれば、名づくべからず。ゆえに仏をまた無称光と号けたてまつる。光によりて成仏したまえば、光赫然たり。諸仏の歎じたもうところなり」
よって作られたものです。
ここで「神光の離相をとかがざれば」というのは、阿彌陀仏の光明は不可思議で非常に

すぐれた光（神光）であるゆえ、その功德の広大なことは、言葉による限定的なすがたや形でもって言い表すことができないということ。それを釈迦如来があえて言葉で説かれたのが浄土の経典でありましよう。

釈迦如来の説かれた『仏説無量寿経』では「無量寿仏の威神光明、最尊第一にして、諸仏の光明及ぶこと能わざるところなり」さらに

「無量寿仏を、無量光仏・無辺光仏・無碍光仏・無対光仏・焰王光仏・清浄光仏・歓喜光仏・智慧光仏・不断光仏・難思光仏・無称光仏・超日月光仏と号す。」
のように、十二の光明として阿彌陀仏の光明の功德が説かれています。

こうして阿彌陀仏の光明は、すがたや形を離れているといわれますが、その光が衆生に届くとき、阿彌陀仏の光明はさまざまな功德ある光として

釈迦如来によって説かれています。

それは身近にたとえてみれば、阿彌陀仏の光明は心の領域の光ですが、物質の光を考えてみますと、太陽光にしてももともと（光は目には見えない）そうです。ところが見えない太陽の光がプリズムなどに当たるとさまざまな色に光って見えます。プリズムを通すと、赤色とか青色とか緑色といった美しい色の光として目に見えます。
太陽の光は無色ですが、それがプリズムに当たれば七色の光に輝くように、阿彌陀仏の光明は衆生（ここでは釈尊）に届く（さるとる）時、十二の特色をもった光の徳として釈迦如来によって『無量寿経』として説かれたのでありましよう。もちろん阿彌陀仏の光明の徳は十二に限らないでしよう。

ただ、釈迦如来が、相（すがた形）を超え離れている阿彌陀仏の光明を、十二光などの諸相の光明として、人の言葉でお説き下さったから、私たちも阿彌陀仏の光明の有難さを少しなりともうかがい知

ることができのです。阿彌陀仏の光明はすがた形を離れているからといって一切説かれなかつたら、私たち衆生は阿彌陀仏の光明に触れる手がかりがありません。そういう意味で阿彌陀仏のはたらきを言葉（有相）で説いて下さったという点にも釈迦如来のご苦勞や恩徳があると思えます。

阿彌陀仏は言葉で限定されない無限定な面からは（法性法身）といわれます。その法性法身が、そのはたらきをいろいろなすがた（有相）で説かれた場合の阿彌陀仏は（方便法身）と名づけられています。

方便とはお手だてということ、方便法身のことを有相と、方便とも申します。有相とはある形を取ることです。真実が衆生の上に形を取って表れ、衆生を真実へと導くはたらきを有相方便といえます。有相方便（うそうほうべん）

という、誤解されて「ウソも方便」というような俗語ができましたが、方便とは、ウソを語ることではもちろんなく、言葉を超えた広大なありがたい真実を言葉でかたどることです。言葉を越えた真実を言葉に表す。それによって、

言葉でしか理解できない私たちを、真実へと導いていくのです。そのようなおはたらきをされたのが釈迦如来です。私たちに与っては浄土の三部経という經典のお言葉がそれです。經典に示された仏のお言葉を通して、そのお言葉を聞いて、私たちは言葉を超えた無相の真実そのもの（法性法身の阿弥陀仏）にであうことができるのです。それがお経の説かれた目的です。

それは〈阿弥陀仏〉ばかりではありません。經典に説かれた〈極楽浄土〉でも同じです。たとえば浄土について『仏説阿弥陀経』には次のように説かれています。

「舍利弗、かの土を何のゆえぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、もろもろの苦あることなし、ただもろもろの樂を受く、かるがゆえに極楽と名づく。

また舍利弗、極楽国土には七重の欄楯・七重の羅網・七重の行樹あり。みなこれ四宝をもつて、周市し圍繞せり。このゆえにかの国を、名づけて極楽と曰う。」

現代語訳（その国をなぜ極楽と名づけるかというと、その国の人々は、何の苦しみもな

く、ただいろいろな楽しみだけを受けているから、極楽というのである。

また舍利弗よ、その極楽世界には七重にかこむ玉垣と七重におおう宝の網飾りと七重につらなる並木がある。そしてそれらはみな金・銀・瑠璃・水晶の四つの宝でできていて、國中のいたるところにめぐりわたっている。それでその国を極楽と名づけるのである。

このように究極的に安らかな浄らかな領域である浄土が非常に感覚的に説かれています。それは、迷える私たちがそれを聴いて極楽浄土に生まれたという願いを発すようにとの思い召しから、浄土を快適で有難い世界として説かれているのです。

しかし、一方、極楽浄土は〈無量光明土〉であると本質的に説かれ、感覚的ですがた形を超えている領域とも説かれています。そこで親鸞聖人はもつぱら浄土を本質的に表す〈無量光明土〉という言葉で浄土を私たちにお示しになっています。

ですから、私たちが經典のお言葉を聞くことによって極楽浄土に生まれたいという願いを起こし、阿弥陀仏の本願を

信じ念佛申すなら、感覚的な極楽を超えた無量光明土といわれる光はかりなき領域に自ずから至らしめられるのでありましょう。

仏のお言葉を通して、言葉を超えた真実に帰入せしめられるのであります。

ですから、經典のお言葉は方便だからといって、阿弥陀仏やお浄土を私たちの小さな了見で自由に言い表すことは非常に注意を要することです。

お経の言葉は真実を知られた仏・菩薩によつてのみ、言葉を超えた真実を言語化するこゝとができるのです。ですから私たちが、阿弥陀仏や浄土のことを言い表す場合は充分気をつけなければなりません。

でなければ、それによつて多くの人を誤った理解に陥らしめる危険があるからです。

蓮如上人は「聖教は句面のごとくくつろうべし」（『御一代記聞書』）と申されて、經典などの言葉

は、まずそのお言葉通りに受け取ることが大事であり、自分勝手な了見で解釈すること戒められています。私たちはしばしばそういうことをしかねないからです。

それゆえ、お聖教の言葉を

解釈する時には、そのお心を知的に了解するだけではなく、經驗的に了得した智慧を得て慎重になされるべきものです。

言葉で説くことができないような真実そのもの（離相の阿弥陀仏）をしかしながら、まったく純粹に顕した〈言葉〉があります。それは經典の長々とした説法ではなくて、無相の真実そのものが直接に言葉になって下さった言葉、それが南無阿弥陀仏の名号です。

この名号は、釈迦如来がこの世にお出まし下さる前からすでにはたらいっている言葉であると先達はいわれています。

この言葉を釈迦如来は説き示され、この言葉に含まれている真実を詳しく私たちにお説き下さったのが浄土の三部経です。ですから『仏説無量寿経』『仏説觀無量寿経』『仏説阿弥陀経』という浄土の三部経の説法は南無阿弥陀仏の功德を説き示されたものといえます。

それでは南無阿弥陀仏とはどういう意味でしょうか。それは阿弥陀ご自身が衆生に直接的に仰せ下さる言葉です。しかも大慈大悲の仰せであり、私たちを救済したもうお言葉であり、大悲のお働きの顕現

であります。

南無阿弥陀仏とは阿弥陀仏が私たちに「助ける」と仰せ下さる直接の言葉であり救済力の表現です。

「助ける」の仰せが南無阿弥陀仏の端的な仰せです。それをもう少し拡げると「助からぬ者を助ける」の言葉です。さらにそれを拡げると「まかせよ（南無）、助からぬ者を助ける（阿弥陀仏）から」という思い召しです。

〈助ける〉の仰せとは、私たちの死と死後そして罪業の一切を引き受けて浄土へと至らしめて浄らかな仏にならしめるとの大慈大悲の誓いであります。

つぎに

「因光成仏のひかりをば 諸仏の嘆ずるところなり」

とありますが、因光成仏というのは、法性法身の仏がその功德を、一切衆生にほどこし与えて、同じ仏になさしめんがために、法蔵菩薩という因位の位において、「私は光明無量の仏になりたい」（第十二願）と誓って修行し、この願を成就して光明無量の阿弥陀仏に成られた。そのことをここで「因光成仏の光」といわれるのです。

因位の時に光明無量の仏に成りたいとの願を起し、この願を成就して、光はかりなき阿弥陀仏に成られました。そして一切衆生を照らし、導き、念仏を衆生に与えて救う仏になられた、それが今の私たちの口に現れたもう南無阿弥陀仏なのです。この光の働きを諸仏方は讃嘆されているとの思し召しです。

一応、このご和讃についてお話しいたしました。ところで、真宗で、阿弥陀仏をご本尊としてお木像にしたり絵に描いたりして、お寺やお内仏（仏壇）に安置して私たちは礼拝しています。これらの木像や絵像などの阿弥陀仏は、どう受け取ればいいのか、りましょうか。

色も形もない法性法身の仏に対して、形をとって私たちの救い主となって下さり、喚びかけたもう阿弥陀仏は、さきほど申しました方便法身（報身）と申します。

しかし、日常、お寺やお内仏にご本尊として礼拝の対象となつて下さっている阿弥陀仏は、方便法身を更に方便化したというか、私たち衆生の現実生活の中で形像化した阿弥陀仏です。

こうしたご本尊は私たちが礼拝の対象として、阿弥陀仏を生活意識の中でイメージ化したものです。さきほど申しました方便法身の阿弥陀仏を極めて方便化したおすがたであります。そういう意味から言えば名号の南無阿弥陀仏とは違つて仮の阿弥陀仏といえましょう。

ですから親鸞聖人ご自身は木像や絵像ではなくて南無阿弥陀仏の名号を掛け軸にして礼拝されていたと伝えられています。

しかしもう一ついえば、掛け軸に書かれた名号、たとえば「南無阿弥陀仏」なり「帰命尽十方無碍光如来」なり「南無不可思議光如来」の文字の名号はたしかに言葉ですが、横になつて平面化した文字、いわゆる動きのない文字の名号です。それに対して、喚び声となり名^{みょう}声^{しょう}といわれるような音声の「南無阿弥陀仏」は能動的な阿弥陀仏です。

能動的な喚び声となつている名号はお念仏の声となつて私たちに現在化したもう阿弥陀仏そのものであり、これが生きたまことのご本尊だといえましょう。

しかし、〈ナムアミダブツ〉の喚び声を対象化して礼拝勤

行の場で拝むわけにはいきませんから、「南無阿弥陀仏」なり、あるいはその意味から「帰命尽十方無碍光如来」などと文字に書かれたものを親鸞聖人は礼拝されておられたのだと伺います。

そういう意味では、お木像とか絵像のご本尊は「方便の方便」としての阿弥陀仏であるといえましょう。

仏教では、阿弥陀仏に限らず、木像とか石像とか絵像などの仏様はみなこのような形での方便化した仏であつて、それ自体を真実の仏そのものとは理解してきませんでした。

しかるに、イスラム教徒とかキリスト教徒から仏教を見たとき、木像や石像を拝む仏教徒は偶像を拜んでいると見えるのでしよう。アジアを旅行して著したイタリアのマルコポーロ（14世紀）の『東方見聞録』を読むと仏教徒のことを偶像崇拜教徒と言っています。そして時には偶像崇拜だとされて、仏像などが破壊されてきた出来事が歴史上とさきどき起こりました。

近年、アフガニスタンで、七世紀の中国の高僧である玄奘三蔵法師もお参りしたというバーミヤンの大仏は過激な

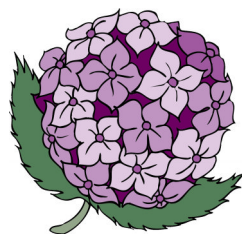
イスラム教徒によつてあつさり爆破されてしまいました。

また私は若い頃、大阪近郊にある大谷派の八尾別院に一時勤めていましたが、ある日ご門徒の家にお参りしましたところ、お内仏の扉が閉まつており、開くとお花は枯れ放題で中はほこりだらけでした。お参りをすまずと、その奥さんが「主人は真宗ですが、私はキリスト教徒ですから偶像崇拜は牧師様から禁止されていますので」とのお話でした。仏像や絵像などというものをあたかも絶対者のように拝むのは愚かな行為だと思つておられるのかなあと思つたことでした。

しかし仏教徒はなにも絵像や木像の仏様をそのまま真実の仏そのものと思ひ込んでいるわけではありません。ただ礼拝するには礼拝の対象物としてこうしたものを安置し、それを合掌礼拝し、その前で勤行し、それを縁としてまことの仏にであつていこうとするのが仏教徒の姿なのです。

ともかくも離相（無相）の阿弥陀仏は名号の言葉（有相）となつて、その姿を衆生に顕し示して、私たちにであいたまい、私たちを無相の普遍的

な阿弥陀仏に帰入せしめようとはたつき続けておられます。名号とまでなつておられる阿弥陀仏が私たちにとつて一番身近であり、能動的な阿弥陀仏であり、阿弥陀仏ご自身であります。阿弥陀仏は「ナムアミダブツ」という名^{みょう}声^{しょう}とまでなつて、今の私に臨在しつつある生きた仏であり、「汝を引き受ける、助ける」と、大悲もて喚び続けておられます。（了）



〈遠方法話予定〉

- ① 六月十三日（十時～二時半）。福井別院。座談有。
- ② 七月三十日（十時～二時半）。名古屋別院。座談有。
- ③ 八月四日（十時から二時半）。福井別院。座談有。
- ④ 十月十日（十時～二時半）。福井別院。座談有。
- ① 十月二十八日（午後一時始）～三十日（午後四時まで）。福井別院。午後座談有。別院に泊まれます。

木村無相のさんの法信 33

(昭和五十八年十一月七日のお便り。ご往生される二ヶ月前です。無相さん八十才、私は三十八才のころです)

* * *

昭和五十八年十一月七日(月)

未明三時四十五分

和上苑の二階の四人ベヤ。自室にて。

つづいての「腰痛」と、「起きると息苦しいので」仰臥しつつ。

半盲 無相

紀さんー

十月二十九日消印のお手紙大変おそく十一月五日(一昨、土曜日)にいただきました。

私の「目」も「カラダ」も、「身」もずっと悪くなり、大変書きにくくなりましたがー。

心臓、そう悪くないはずですが、この間の四月ごろから、二・三メートル歩くと、イキが苦しくなり、全然食欲もなく、食事はほとんど食べなくなり、手紙もハガキも書けなく、ねむってばかりいました。昨日だけ、夕食たべにいて、オカユ茶碗にすほど食べました。

そして、いそぎの返事一通だけ書きました。

この分では、また入院するかかわからなくて、入院準備(ニモツ)しておかねばと思っています。

○

33

一通、一通の手紙、いつ、最後のものになるかわからぬと、思つて下さい。残念ながら。書きたいことは山ほどあるのにー

さてこの手紙一枚書くと一服です。「目」を休め、「手」をやすめ、「首」、「肩」を休めー

さて、お手紙を沢山抜粋させてもらった方がわかりよいと思いますが、とても、沢山抜粋出来ないので、一寸だけさせていただきます。

○

「自分の計らいにふりまわされております」

とありますが、それに対して「ご消息」のお言葉(善性本)

「他力といふは、凡夫のハカライのチリバカリもいらぬなり。」

かるが故に、義なきを義とすと申すなり。このほかにもうすべきことなし。

ただ仏にまかせ給えと大師聖人のみことにて候え

とあるお言葉、

また末灯鈔のお言葉

「聖人のこのお言葉(ご消息、末灯鈔)は、ハカライあがいて、私に対する一大鉄槌の大切のお言葉。歎異抄もさることながら、末灯鈔(ご消息)なかりせばーの感がいたします。合掌」

で十月二十九日の紀さんの手紙は終わっています。そのアトがわかりません。

○

「ご消息、末灯鈔」の聖人の

「はからいなく、弥陀にまかせよ」

のお言葉が、ハカライやまぬ紀さんに「一大鉄槌」となって、

紀さんのハカライがやんで、生死出離のことは如来に、マルマカセ出来るようになった

ということか、

又は、聖人のお言葉通りにしようとして、ますますハカライのやまぬ、弥陀にマルマカセの出来ぬ自分ということが、アキラカ二なったというのか、

また、その他、どうなったのか、十月二十九日のお手紙では「一大鉄槌」のアトのことが、私にはわかりません。

それで、紀さんのことは、「一大鉄槌」となって、それで、どうなったのか、わからぬので、シカタないので、私自分のこと

を書かせてもらいましょう。

また、一服します。

○

さて、今日の返事として自分の今までのありのままを、出来るだけカンタンに書かせてもらいます。要点だけを。

○

昭和八年(二十九才)から十年十二月まで、(第一回)真言の寺にいて、これはむつかしいと暇をもらって、真言の寺を出て、昭和十一年三月から真宗聞法に出て、(三十二才)

一番はじめは東京の仏教信修林で、昭和十一年五月から十月まで、朝からねるまで「称名念仏」ばかりやりました。日課、何万ベンともなく。そして結局、その当時は念仏は「真実の心で称えなければいけない」と思っていたのですが、半年、朝からねるまで称えに称えて、結局

「一声の念仏も、真実の心では申せない自分である」

と気づかされて、

「称えてマイロウ。称えて助かろう」

ということをやめて、今度は、お西のアリガタイお寺にいったのでした。

○

ソコではお西ですから、

信じられたか、

タノメたか、

信心いただいたか、

どうか、

ばかり、マル三年言われ、「チヨコチヨコ信心数しれず」

でナンベン、ナン百ペンも、感激しては、さめて、結局、

信じてマイルコトも

信じて助かることも

弥陀をタノムことも

落第して、とうとう「求道」「聞法」はとりやめにして、市井に出て、働くことにしました。

○

それから一年半、真宗の本一冊もよみませんでした。真言時代のお念仏だけは、煩惱生活についてはなれず、時々、申されるのでしたが、私はメイワクに思ったが、やまないのしかたありませんでした。

○

一年半後、又、昭和十五年十二月(三十才)から求めはじめ、昭和三十年七月までの二十五年間(昭和八年から)に真言と真宗を三往復して、いよいよ真言をあきらめて「真宗一筋に聞こう」と、昭和三十三年七月(五十四才)で、高野山の真言道場を最後に下山して、真宗一方を聞くことにしました。

(続く)

